

8

古典を引用した文章の読解②

1

次のAは、平安時代中期の清少納言の随筆「枕草子」の雪山を作ったときのエピソードの原文であり、丙の文章はその現代語訳である。Bは当時の女流作家に関する対談である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

師走しはすの十余日よひのほどに、雪いみじう降りたるを、女官にようどもなどして、縁えんにいとおほく置くを、「同じくは、庭にまことの山を作らせはべらむ」とて、侍召まひして、仰せ言おほにて言へば、あつまりて作る。主殿とのもりの官人の、御きよめにまゐりたるなども、みな寄りて、いと高う作りなす。宮司みやうきなどもまゐりあつまりて、言加ことへ興ず。三四人まゐりつる主殿寮とのもつかさの者ども、二十人ばかりになりにつけり。里なる侍召しにつかはしなです。「今日けふこの山作る人には日三日給たべし。またまゐらざらむ者は、また同じ数とどめむ」など言へば、聞きつけたるは、まどひまゐるもあり。里遠きはえ告げやらず。

作り果てつれば、宮司召して、絹二ゆひ取らせて縁に投げ出いだしたるを、一つ取りに取りて、拝みつつ腰にさしてみなまかでぬ。袍かろぎぬなど着たるは、さて狩衣かりぎぬにてぞある。

「これいつまでありなむ」と、人々にのたまはするに、「十日はありなむ」「十余日はありなむ」など、ただこのごろのほどをある限り申すに、「いかに」と問はせたまへば、「正月むつきの十余日までは侍りなむ」と申すを、御前まへにも、「えさはあらじ」とおほしめしたり。女房は、すべて、「年のうち、つごもりまでもえあらじ」とのみ申

すに、「あまり遠くも申しつるかな。げにえしもやあらざらむ。つたちなどぞ言ふべかりける」と、下には思へど、「さはれ、さまざまなくとも、言ひそめてむ事は」とて、かたうあらがひつ。

〔枕草子〕による

十二月の十日過ぎぐらいに、雪がたいそう降ったのを、女官たちなどで、縁側にとでもたくさん置いたのを、「どうせなら、庭に本当の山を作らせましょう」と言つて、従者を召し出して、^{*}（中宮様の）^{*}ご命令だと伝えると、集まつて作る。^{*}主殿寮の官人の、ご清掃に参上している人なども、みな寄つてきてとても高く作りあげた。^{*}宮司なども参上し集まつて、口出しをしておもしろがる。はじめは三、四人参上した主殿寮の者たちは、二十人ばかりになった。自宅にいる従者を召し出すなどする。「今日この山を作る人には三日働いた扱いにしてやろう。また参上しなかった者は、同じ数を差し引く」などと言うので、聞きつけた中には、あわてて参上する者もいた。自宅が遠い者は告げにやることできなかった。

作り終わったので、宮司を召して、絹を二たば取らせて縁側に出したのを、一つずつ取つて、お辞儀をして腰にさしてみな退出した。（ふだんは正装の）^{*}袍などを着た者は、そういうわけで（今は略式の）^{*}狩衣でいる。

「これ（雪山）はいつまであるでしょう」と、人々におっしゃるのに、「十日はありましょう」「十何日かはありましょう」な

とよめりければ、みな人、かれいひの上に涙おとしてほとびにけり。

〔新編 日本古典文学全集〕による

昔、男がいた。その男は、自分の身を用のないものと思つてしまつて、京にはいるまい、東のほうで住むのによい国をさがそうと出かけた。昔からの友人、一人二人で行つた。道を知つてゐる人もなくて、迷いながら行つた。^{*}三河の国の八橋といふところに着いた。そこを八橋といふのは、水の流れが八方に分かれてゐるので、橋を八つわたした事によつて、八橋といつた。その沢のほとりの木のかげに降りて座り、乾飯^{*かれい}を食べた。その沢にかきつばたがとても美しく咲いてゐた。それを見て、ある人が言うには、「かきつばた、という五文字を句の初めに置いて、旅の心をよんでください」といふので、よんだ。

^{*}唐衣は着てゐるうちに着なれるが、同じように馴れ親しんだ妻が京にゐるので、はるばる来た旅がことさら思われるのだよ。

とよんだので、人はみな、乾飯の上に涙を落として（乾飯が）ふやけてしまつた。

〔注〕柳橋水車——橋を中心に柳と水車を描く、屏風^{びやうぶ}絵などの構図。

『播磨国風土記』——『播磨国』は昔の国名で、現在の兵庫県の一部。『風土記』は、朝廷の命令で、各地の風土や産物・伝説などを記させたもの。

きざはし——階段。

八十島の祭り——天皇の即位後に行われた、国土と皇室の安泰を祈る儀式。

和数考——日本人の意識の中での数がもつ意味合いを述べたもの。

大倉喜八郎——江戸時代末期に鉄砲店を開業し、明治時代になってからは、

軍に鉄砲を売つて成功し、大財閥に育て上げた商人。

意匠——美術品や工芸品などのデザイン。

御所車——牛車。車輪が図案化された。

石橋——仙境である中国の清涼山^{せいりやうざん}の麓にあるとされる橋。能や歌舞伎に登場する。

歌枕——和歌に詠まれた有名な場所。

モニュメント——記念碑や遺跡。また記憶に残るような業績。

三河の国——昔の国名で、現在の愛知県の一部。

乾飯——飯を干したものを。旅行用の携帯食。

唐衣——唐風の衣服。

〔問1〕⁽¹⁾ 日本の川には細い流れがたくさんあるから、あちこちに橋を架けたんですね。とあるが、Bの古文において「細い流れがたくさんあるから、あちこちに橋を架けた」に相当する部分はどこか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 道しれる人もなくて、まどひいきけり

イ 三河の国八橋といふ所にいたりぬ

ウ 水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせる

エ その沢のほとりの木のかげにおりゐて

〔問2〕⁽²⁾ たぶんとあるが、この言葉が直接かかるのは、次のうちのどれか。

ア 流れは

イ いろいろな所に

ウ あつたと

工 思いますから

〔問3〕『十六夜日記』⁽³⁾とあるが、『十六夜日記』の次の記述を説明したものはどれか。あとから最も適切なものを選び。
暗さに橋も見えずなりぬ。

〔新編 日本古典文学全集〕による〕

ア 川の流に八つの橋が架かり、かきつばたが咲いている。

イ 橋はあったけれども、暗くて何も見えなかった。

ウ かきつばたは群生していたけれども、橋はなくなっていた。

エ 橋やかきつばたどころではなく、まったく何もなかった。

〔 〕

〔問4〕日本では数字の意味がわからないと読み進められないくらい、数字が象徴的な意味を持つてゐるんですよ。とあるが、「八」の数字はどのような意味を持っているのか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 全体として釣り合いがとれていることを表し、欠けるところがないという意味。

イ 数が多いことを表し、完全ではないけれども無限の可能性を秘めているという意味。

ウ ある物が過去にあったことを表し、目には見えないけれども、確に残っているという意味。

エ 完全な数である九に満たないことを表し、形あるものはすべて壊れるものだという意味。

〔 〕

〔問5〕田中さんの発言のこの対談における役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 櫛や蒔絵、着物の柄の象徴性を示すことによって、八という字についての思い入れの深さを明らかにし、デザインについての日本独自の考え方について議論しようとしている。

イ 意匠になつてしまえば、物自体は消えても象徴性が残つていくことに触れ、デザインというものの大切さについての話題を引きだそうとしている。

ウ 直前の高階さんの発言を受けて自分の知っている同じような例を示すことで、さらに興味深い新たな話を聞き出して、対談の内容を深めようとしている。

エ 数字の象徴性についての自分の発言を踏まえて、数字に限らず物自体がなくなつても音や言葉として残つてゐることを示し、象徴性が話題の中心となるきっかけを作っている。

〔 〕

〔問6〕見えるものと見えないものの連続性みたいなものね。とあるが、「見えるものと見えないものの連続性」について説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 実際の物とそれを象徴的に表現したものとを区別なく受け止め、繰り返すことで記憶として伝承していくこと。

イ 人間の記憶だけでは心もとないので、実際の物を象徴するものをモニュメントとして残して伝えようとする。

ウ 物は失われるのが当たり前だからこそ、記憶を託した物を大切に扱い、長く保存できるように工夫すること。

エ 生きている人間となくなつた人々が、年中行事を通して頻繁に交流し、記憶が薄れないようにすること。

〔 〕

恨不移封向酒泉

左相日興費萬錢

飲如長鯨吸百川

銜杯樂聖稱避賢

宗之蕭灑美少年

舉觴白眼望青天

皎如玉樹臨風前

蘇晉長齋繡佛前

醉中往往愛逃禪

李白一斗詩百篇

長安市上酒家眠

天子呼來不上船

自稱臣是酒中仙

張旭三杯草聖傳

脫帽露頂王公前

揮毫落紙如雲煙

焦遂五斗方卓然

高談雄辯驚四筵

恨むらくは封を移して酒泉に向かはざるを

左相は日興万錢を費やす

飲むことは長鯨の百川を吸ふが如し

杯を銜み聖を楽しみ賢を避くと称す

宗之は蕭灑たる美少年

觴を挙げ白眼青天を望む

皎として玉樹の風前に臨むが如し

蘇晉長齋す繡仏の前

醉中往往逃禪を愛す

李白一斗詩百篇

長安市上酒家に眠る

天子呼び来れども船に上らず

自ら称す臣はこれ酒中の仙と

張旭三杯草聖伝う

帽を脱し頂を露はす王公の前

毫を揮ひ紙に落とせば雲煙の如し

焦遂五斗まさに卓然

高談雄弁四筵を驚かす

(續國譯漢文大成)による)

李白が一斗を飲めば詩は百篇

長安の市中にあつて酒場で眠る

皇帝の使いが呼びに来てその船に上らず

自ら名付けるには私は酒中の仙人であると

〔注〕空の状態——仏教で、この世のすべてのものはかりそめのものだとし、こ

だわらない状態。

解脱——執着や束縛から離れて心が自由になること。

煩惱——心を悩ませ、苦しみを与える欲望や迷い。

荒凡夫——一茶が自分の目指す生き方を述べた言葉。煩惱のまま、平凡に生

きる人。

定住漂泊者——あてもなくさすらうが、帰る家はある人。

大急ぎでまとめてみました——漂泊者と放浪者の違いを見比べるために、一

茶と山頭火の句を何セットか挙げて、これを

見ながら対談している。

放浪——各地をさすらって、行くあてもないこと。

軽み——芭蕉が提唱した俳句の境地。日常素朴なことを平易な言葉で表現し、

作意が見えないことをよしとした。

文人——詩文や書画などをたしなむ人。

連句の巻き方——連句の作り方。連句とは、一人目が五・七・五を詠み、次

の人が七・七を付け、さらに別の人が五・七・五を付け

……という形で句を作っていく文芸の形式。

むくどり——田舎者だとあざける言葉。

〔問1〕 Aの中の――を付けたア、イの修飾語のうち、被修飾語との関係が異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

〔問2〕⁽¹⁾ どちらもそういう意味の正直さが感じられまして私は好きです。とあるが、ここでいう一茶の「正直さ」を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 俳人としての美意識に従って自分のイメージを練り上げ、現実を度外視した俳句を想像力豊かに作り続けていること。

イ 俗世間のしがらみをすべて捨てきって、放浪者としての姿勢を徹底的に追求したいという思いに忠実に過ごしていること。

ウ すべてのいきものを自分と対等なものと考え、分け隔てなく接し、ともに助け合って生きていこうという姿勢でいること。

エ 俗な気持ちから離れられないでいる自分を素直に認め、有りのままに生き、包み隠さずさらけ出して生きていること。

〔問3〕⁽²⁾ 文人意識が文人趣味に変わってきて、とあるが、ここでいう「文人意識」と「文人趣味」の違いを説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 文人意識は俳句を作るうえでの繊細な感覚を研ぎ澄ますことをいい、文人趣味は宗匠として教え方に工夫を凝らすことをいう。

イ 文人意識は武士のたしなみとして格式を重んじることをいい、文人趣味は広く詩文や書画に親しみ自由に表現することをいう。

ウ 文人意識は文人としての有り方を突き詰めて自分を律する厳しさをいい、文人趣味は単に風流を好むといった緩やかな感覚をいう。

エ 文人意識は俗な発想を嫌って理想の自分を句にする態度をいい、文人趣味は有りのままをそのまま句に作る態度をいう。

〔問4〕⁽³⁾ 酒を飲めば飲んだで、彼が詩を書いたとあるが、Bの漢詩において「酒を飲めば飲んだで、彼が詩を書いた」に相当する部分はどこか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 李白一斗詩百篇

イ 長安の市上酒家に眠る

ウ 天子呼び来れども船に上らず

エ 自ら称す臣はこれ酒中の仙と

〔問5〕⁽⁴⁾ 村上さんの発言のこの対談における役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 直前の金子さんの発言に対して賛同しながら芭蕉の宗匠としての活動について補足し、一茶や山頭火との違いを明確にしている。

イ 芭蕉の立場や来歴を改めて確認することを通して、芭蕉の最晩年の有り方についてのさらなる考察を引き出そうとしている。

ウ それまでの内容を踏まえて芭蕉の句が年齢とともに変化したことを示し、生き方と作品との関連についての考えを深めている。

エ 俳句を作るときの芭蕉の有り方についての考えをまとめ、対談のテーマである一茶と山頭火の比較に話を戻すきっかけとしている。

5				
〔問1〕	〔問2〕	〔問3〕	〔問4〕	〔問5〕
ア	ア	ア	ア	ア
イ	イ	イ	イ	イ
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
エ	エ	エ	エ	エ
小計				
／ 25				

(各5点×5)